

蒙古佛教の職階制について

春日 禮智

一

蒙古の佛教——それは宗教といつても佛教といつても、僅かにラマ教といふ特殊の密教があるだけであるが——これは蒙古人の全精神、全文化を支配するのみならず、彼等の政治も經濟も、悉くこのラマ教の精神的原理から割り出されてくる、最も貴重な蒙古人の生活指導原理なのである。従つて蒙古では、ラマ教は單なる一文化部面としての宗教であるばかりではなく、それは蒙古人にとつて、これなしには、盲目にならなければならず、何もできない程彼等の生活に滲透してゐるのである。ここに於いてラマ即ち蒙古佛教僧侶は、宛も往昔に於ける印度の婆羅門の如き優越的地位を占有し、ラマ教獨特の組織を作つてゐるが、その最も代表的なものとして、ラマの職階制といふものがある。以下これについて些か見

聞の一端をのべて見たいと思ふ。

二

蒙古の佛教僧侶——即ちラマは、最近めつきりその數を減じたが、それまでは男子の約半數がラマであつたと稱せられる。ラマとは、ラマ・フン即ち上人の義で、これは俗人即ちハラ・フンに對する言葉である。ハラ・フンとは黒い人、即ち悪い人の義で、それは未だ煩惱の日暮しから抜け切れないから、悪い人なのである。これに反し、ラマは人生の俗塵を捨てた人で、人を濟度する清淨の修行者であるから、この善知識を上人といふのである。

さて人が出家してラマになつた場合、その人の生活は本來教團に於いて保障すべきであるが、元來蒙古のように僧侶の多い所では、單に僧侶が多いのは信仰が厚い象

徴とばかりは見られないのであつて、そこには多分に社會政策の制約がある。それは蒙古は世界稀に見る純牧業國であり、家畜の頭數からみて、早くより牧野は飽和状態にあり、その一定數より殖えてはならぬ家畜に依存する民族の生活は、勢ひ人口が増加してはならぬことになり、こゝに人工的産兒制限と、政策的産兒制限が行はれるわけである。その政策的産兒制限とは、長男或は家の後繼者を除き、他の男子を寺廟に上げてラマにすることである。しかし、この場合上げるといふことは、王様と共に、國內財産の大部分を占有する富裕な廟みやから、いらぬ次男坊以下を貰つてもらふことである。従つて在家では、その子供を寺に差上げたから、これでやれやれと經濟的負擔を免れたのではなく、そのラマが相當の習學と修行を終つて、何か廟の役を持ち、廟からの支給に依つて、經濟的獨立のできるまでは、そのラマの生家では、ラマの學費及び生活費を支送りしなければならぬのである。こゝに於いて、ラマたるものにとつては、役持ちのラマになるといふことは極めて重要なことになり、そうでないものは、いつまでも生家の厄介にならねばなら

ぬことになるので、彼等の多くは、寺にばかりゐないで、時に家に歸つたり、在家ラマといつて、生家の多忙な時には、自分の生家に歸つて、仕事の手傳ひをしなければならぬのである。

一方僧侶の職階制は清朝の政策と、佛教々國の内部的生活の必然的發展として、次第に複雑化してきてゐる。

しかもその間、もとはその名が實際の職名を示したもので、後には單なる空名として、實職と實録とを伴はぬ位として殘つてゐるものも多く、職名と位階とのはつきり判別し難い場合も少くないのである。又同じ職階をもつものも、大廟の達だつラマと、小廟の達ラマとは、その實力に於いて著しく相違があるので、達ラマであるから僧侶の最高位を持つてゐるラマと思ひ誤つてはならないわけである。

次に蒙古には活佛といふ特別なラマがある。これは生き佛であつて、人間ではなく、佛菩薩の再誕——還相廻向であると考へられてゐる。その起源は、西藏にあるが、最初西藏佛教のマルチン・ルーテルともいふべき改革者、宗喀巴が入滅するとき、その二大弟子である達賴だらいラ

マと班禪^{はんぜん}ラマとに命じて、「我が滅後、汝等はいつまでもこの西藏に再誕して佛教を弘めよ」と言つたので、二人はその旨をうけて夫々觀音と彌陀の化身として代々西藏に生れ變つたことに依るものとされてゐる。爾來達賴ラマは政治に長じ、班禪ラマは學徳に於いて秀いでゐる。その後西藏にも蒙古にも、そして青海地方にも多くの活佛が出現した。そのうち最も有名なのは西藏の達賴、班禪と、外蒙のツェブツェンタンバ・ホトクト、内蒙の章嘉^{ぢんせや}ホトクトで、此を四大轉生喇嘛といふのである。ホトクトは活佛中でも最高位にあるものである。然して清朝はラマ教に對して極めて優遇策を講じたから、この時西藏に十八、漠北蒙古に十九、漠南蒙古百五十七、青海地方三十五、外に駐京ホトクトと言つて、北京駐在の活佛を入れ、合計二百四十五人といふ多數の活佛ができた。又内蒙でも、多倫ノールには十三佛倉^{さんぶ}といつて十三活佛の倉もある。此等に依つて、蒙古に於ける活佛が、如何にたくさんあるかが知られるであらう。

然らばその活佛とはどうしてできたかといふに、最初生れた頃二三歳か三四歳の幼時、人がまだものもよく言

ひえない時に、ある日その兒が急に口を開いて自分は地藏菩薩の生れ變りだとか、不空羅索觀音の轉生だとか言つたりしたとする。するとそれを聞いた人々は、この兒は神童で、佛菩薩の轉生即ち生れ變りで、生きた佛——活佛であるとして大騒ぎをし、直ちに多くの信者から寄附を集めて、その活佛中心の寺やら財産を作り上げる。これがそもそも活佛の起源で、其以後はその人が死ぬとその人の遺言に依つて、自分は何月幾日、どちらの方角、何百里離れた地方のどういふ家、人の子として生れるといふやうなことを言つて死ぬ、後に残された人々は其の遺命に依つて、その遺言に最も近い人の子を捜して之を第二の活佛として連れてきて育て、奉戴式を舉行するといったやうな選び方である。若し前代の活佛に遺言がなかつた時は、占者に占つてもらつて、その占ひによつて捜し廻る。又或る活佛は、生前非常に學徳があり、或は常人では思ひもよらぬ犠牲的行爲を行つてよいことを行つた場合にも、たとひその人が活佛でなくとも、後の人がああいふ豪い人はたゞ死にきりではあり得ない、必ずや佛菩薩となつて、還相廻向して、この世に生れてきて

衆生濟度するに違ひないといふと、こゝに又その人の轉生者を搜し出して、第二代は單なるラマでなく、活佛として迎へられることもある。こうして活佛は増加する一方で、決して減少しない。活佛が一代できると、必ず之に附隨した相當の財産が信仰に依つて集められるから、減る氣づかひはないのである。こゝにいふことは西藏系佛教の一大特徴であつて、常識から考へると、實にをかしのことのやうにも考へられるが、又その選出方法にも相當のトリックが行はれてゐることも想像できるであらう。

蒙古人の中には、若い人々の間にどうして蒙古だけに活佛があり、他の國、例へば日本佛教、日本の國に活佛がゐないのか、不思議に思つてゐる者も出てきてゐるが、一般の人は相變らず、絶對的に之を信じてゐる。

蒙古には活佛の外に、特權あるラマとしてトイン・ラマといふのがある。トイン・ラマといふのは、王様——貴族の子弟でラマになつた人で、既にさういふラマは、修業完了しない前に、他のラマより數段高い位に据ゑられたり、特殊扱ひされたりする。例へば徳王の息、アバガ大王の弟で、ヤンド・スムのラマ、ウランチャップ盟

の林王の息子、東スニット旗の馬王の長男ゲンデンビル、貝子廟にゐるゾリクト王の息子ドブチラマの如きが此である。此等のラマの中には、王さまの作つた王府廟わんふんやうの主任となつてゐる人もある。

三

以上は蒙古のラマの中に、特殊的階級のあることを述べた次第であるが、次に本論、即ち蒙古佛教の職階制について述べて見たいと思ふ。

蒙古佛教の職階制については、大別して職任と學階について考へられる。併し學徳がなければ職任は與へられず、職任も多く學徳と共行するから、この兩者は屢々混同され、はつきり分けることができないのである。又活佛にもホトクト、ゲゲン、シャブルン等の差があり、ホトクトは最高の活佛であるが、十代ゲゲンが続けばホトクトになれるとも言はれてゐるが、中々十代つゞいたものは少く、多く七八代でホトクトを稱してゐる。

活佛は前述の如く佛の轉生者——化身の義であつて、藏語フビルガンフビルガンをいふのである。フビルガンは呼畢爾罕、湖必勒罕、呼彌勒罕、胡畢爾罕等と寫し、支那では

佛爺又は活佛といつてゐる。その發生は西藏にあるが、蒙古ではその確認者として、西藏の二大ラマの認可を経なければならぬことになつて居り、後世では、西藏まで行くのが大變であるから宗喀巴大師の出生地である青海の塔爾寺即ちグンブム寺に伺ひを立てるのみで轉生者を決めることが多くなつた。選ばれるのは多く靈異兒、美好兒で、王公にして此の制度を悪用したものも少くないといふことである。

清の乾隆五十七年、活佛の籤定法がきめられた。此に依ると、西藏のポータラ廟、北京の雍和宮に金本巴瓶ぎんぽんぱびんをおき、ここで籤に依つて占つて候補者數人ある中、最後の一人を選定するといふ方法である。此は候補者數人があるときのことであるが、候補者一人でも一應はこの方法に依つて選定の形式だけにとつてきたやうである。而して班藩院公冊にのせられた活佛は、西藏の二大喇嘛の外、西藏に十九人、内蒙五十五人、外蒙二十七人、西蕃四十人、北京・多倫諾爾各十三人、その他青海の察漢ちやかん、庫倫の哲布尊丹巴ちやくふそんたんぱホトクト等合せて百五十六人であり、その後更に群小の活佛が増加したことは前述の如くであ

る。

この外活佛には色々の稱號がある。ハンホ(堪布)といふのは西藏語の教師の義であり、パンデタ (Pandita) 即ち班第達は梵語の學者の義、ダルハン(達爾汗)は前任棟梁、ノモンハン(諾們汗)は法王、チョルデ(綽爾濟)は法主の義とされて居り、シャブルン(沙布隆)は御前様の義である。此等の名稱には夫々因縁があると思ふが詳しいことはなかなかわからない。

四

活佛といふ普通の人には望んでも不可能な地位にある高位ラマは別として、實力に依つて登りうるラマの最上位はダールラマである。ダールラマは達喇嘛と寫し、今はむしろ大喇嘛たたらまと書くことが流行してゐるが、原語は寧ろ達喇嘛が正しい。但しダールには大の義も含んでゐるから、音をターと寫して、大の字を書くと、見たところもよく、大の字を好むやうになつたものらしい。此は廟の實權者である。

達喇嘛の中にも色々あり、チャサク・ダールラマ(札薩克達喇嘛)はダールラマにしてチャサク即ち王様の權力を

具へた者である。ヂャサクは管旗の人で、旗即ちホシヨ

ンは縣に相當する。従つてヂャサクは知事であり、殿様——蒙古では王様といふのである。此のヂャサクは牧地と人民即ちシャビナル(從者)を有し、生殺與奪の權力を持つてゐる。然るに蒙古のラマ中には、その王様に匹敵し、むしろ王様をして膝下に跪かしめる程の大ラマがある。このラマは政教兩面の權力を有し、殆んど活佛に限られてゐる。庫倫のヅエブツェンタンバ・ホトクト、小庫倫のシレート庫倫ヂャサク・ダーラマ、多倫の章嘉^{ヂャンギヤ}ホトクト、厚和のシレート・ホトクト等が此である。又多倫の小活佛達、西公旗のメルゲン・ゲゲンも相當の人民をもつてゐるし、甘珠爾瓦ホトクト、ダヤンチ・ラマ、外蒙から來たデロワ・ホトクト、ワチルダラ・フビルガ^{フビルガ}ン等も數百千のラマを引率してゐる。

ヂャサク・ダーラマには正ダーラマあり、副ダーラマあり、又單にヂャサク・ラマと稱するものもある。

ダー・ラマは廟の實權者で、昔は西藏で修行してきた高德のラマや王公貴族の子弟から多く出たが、今は必ずしもそうではない。

ダー・ラマの候補者に副ダー・ラマがある。此は廟に依つてあるところもない所もある。

次に廟の中堅幹部にデムチがあり、得木奇、徳木奇、徳穆氣、徳默奇等と書いてゐるのが夫れである。デムチは助役の義で、その仕事に色々の分科がある。後輩を指導したり、弟子を養育したり、經文を傳授したり、會計を預つたりする。蒙古の廟には本山といふ程のものはないが、官との連絡、寺廟の綜合的事務を執る喇嘛印務處といふものがある、而してデムチの中でも、印務處のデムチは最高のデムチで、印務デムチといふのである。

次にシャンゾトブ(商卓特巴)は經濟主任の義で、ゲゲン倉といふ活佛の専有家屋内の總取締りである。

蘇拉喇嘛は閑散、又は前任ラマの義である。

ゲスクエは西藏語の監視者の義で、格斯貴、吃速貴、克什貴と寫し、值月と譯し、日直のことを司り、なかなか威張つてゐる。ラマの取締り役で、讀經作法、戒律に關する事務一切を取扱つてゐる。又ゲファイともいふ。

チブルはゲスクエの助手であり、隨從者である。

オンザト又はオムジトは、藏語で經頭の義である。聲

明の調整者で、文字達、文斯特、溫藏と寫してゐる。

ニルヴ又はネルヴも同じく藏語で、出納係の義である。經濟方面の事務、殊に炊事と倉庫の鍵番が主なる仕事である。

以上は廟の主なる役で、この外ハニル、ゴニル等堂宇の鍵番などがあつて、僧伽の統轄や取締りを行つてゐる。

五

ラマの學階ともいふべき方面に於いては、その最高者に聖者、聖人の意味のボグドといふ言葉を冠する。これは極めて稀少である。

ホトクト又はフトクトは呼圖克圖と寫し、藏語の聖あるもの、壽あるものの義で、活佛中の最高位である。

次はゲゲンは格限に寫し、明るい、光明、光明者、賢い人の義で、普通活佛といはれるのは多くゲゲンである。蒙古のゲゲンは概ね三乃至五位位で、十代以上のものは少い。十代續けばホトクトになりうる。

ゲゲンの次にシャブルンがある。之は活佛中の最下位である。

此の外ハンボ(堪布)、ガブチ、ハーランバ又はサーランバ、アランデンバ(蘭占巴)又はランヂャンバ、ンガクリンバ又はアグリンバ、ツェリンバ又はセイリンバ、マンランバ又はマーランバ、アルムチ、グウシ、オンブ(溫布)、タニル(鎧呢爾)、シャビ(篩溫)等の位階があるが、なかなか複雑で、又廟々に依つても位置がちがうから簡単に述べ難いといふことである。ハーランバは、拉薩のチョイリ・ラツサン即ち顯教學部の卒業生で、學位中の最高で、極めてその數も少い。ウランチャップ盟に二人あるとか、また蒙古中にはゐないとも稱せられてゐる。

アランデンバはチョイリ・ラツサンの卒業生で、學位としては最高と見做されてゐる。

ンガクリンバはジツドワ・ラツサン即ち密教學部の卒業者に與へられる學位である。

ツェリンバはデンホル・ラツサン即ち密教の最深奥の奥義を研究する時輪教學部の卒業者に與へられる學位である。

マンランバはマンバ・ラツサン即ちラマ醫學部の卒業

者に興へられる學位である。

六

蒙古のラマの僧位學位といふものは以上で大體つきるやうであるが、その組織の配當は廟々によつて色々相違があり、省略もあるから、此を日本の或る特定の宗派のやうに、整然とし得ないのである。但し、我々にはわからないが、彼等の仲間では不文律に依つて自然にその階級の上下がわかつてゐるし、話合ひによつて席順の上下もつくことになつてゐるわけである。又職階制とまでは行かないでも、お互ひの間に色々な敬稱が行はれ、それが或る場合には位の見做されてゐる場合も少くなかつた。又その間に正副、大小、最高等の字を上冠して、誇稱し、階級を區別してゐるから、いよいよ六かしくなるのである。此等の調査は、各廟についてその廟の制度組織を研究して始めてはつきりすることである。但し廟個々の調査に依つて、ある寺廟の制度がかうであるから、他の、すべての寺廟の制度もかうであると決定するのは大なる誤りである。

以上簡單ではあるが蒙古佛教々團内の制度の一端を、

調査に基いてのべた次第である。各固有名詞の呼び方、意味等はすべて蒙古人の説に基いて記したので、或は正確を保し難く、誤りがあらうと思ふ。筆者は藏語を知らぬので、特にこの點を斷つて、讀者の御示教を得たいと思ふものである。

(五一頁より續き)

自己の往相が自己の知覺計量を超えて、佛國莊嚴の御佛事に參會せしめられるところに還相をきゝえないか。もとよりわれらが分別計量を超えたる世界であり、自己にありては嚴しく往相の一面に起たしめられることである。かくて念佛救濟の歴史は往還の二廻向を以て、この地上に綿々と無窮に無邊の生死海を度して南無阿彌陀佛と成就されゆくのである。(昭和二四・六)